

「学生ボランティア団体活動レポート」

大 学 名	明星大学
団 体 名	きらボ学生サポーター

タイトル：活動からの学びと今後の展望

私たちの団体名「きらボ学生サポーター」は、明星大学ボランティアセンターの愛称である「きらきらボランティアセンター」の略称を冠している。

現代の学生生活において、ボランティア活動は重要な社会参画の機会として認識されているものの、多くの学生にとってはまだまだ「ハードルが高い」活動として捉えられているのが現状である。情報が掴みにくく、どのように参加すれば良いのか分からないという声も多く聞かれる。私たちきらボ学生サポーターは、「学生とボランティアを繋げる」という明確な目的のもと、このような課題と向き合い続けてきた。

私たちの第一の活動軸は、ボランティアに関する情報を学生に継続的に発信することだ。大学内でのポスター掲示、LMS アプリでの情報公開、Instagram を活用した広報活動など、多様な手段で情報発信を行ってきた。

しかし、当初はボランティアに参加する学生数が伸び悩んでいた。団体内で何度も会議を重ね、その原因を分析した結果、「ボランティアはハードルが高い」というイメージと「情報が掴みにくい」という2つの根本的な課題が浮き彫りになった。

これらの問題を解決するため、私たちは対面での活動に重点を置くことにした。具体的には、お昼の時間を利用してボランティアに関する相談スペースを毎日設け、いつでも気軽に相談できる環境を整備した。さらに、大学の講義での講演や演説の機会を増やし、ボランティアが身近で誰にでもできる活動であることを直接的に伝える活動を展開した。

この取り組みの結果、多くの学生にボランティアについて認知してもらい、実際の活動参加につなげることができた。ここから私たちは、課題の根本的な原因を言語化し、それを活動に活かすことの重要性を学んだ。

第二の活動軸は、私たち自身がプレイヤーとして実際にボランティア活動を行うことだ。自分たちが主催するイベントの運営から地域団体のお手伝いまで、幅広い実践活動を展開している。

特に力を入れている取り組みが、毎年8月上旬に開催している「夏の工作教室」だ。このイベントは幼稚園生と小学生を対象とし、夏の自由研究のお手伝いと子どもたちの新たな発見を目的としている。明星大学内には16のボランティアサークルが存在する。この全てのサークルと連携したことで、スライム作りや缶バッジ作り、ネームプレート作りなど、多種多様なワークショップを提供することができた。

今年度は、前年度の課題であった「サークル同士の交流不足」を解決するため、運営者側も楽しめることを重視した改善を実施した。その1つに、「シャッフルタイム」という制度を導入した。一定時間になると他サークルのブースに特定人数が移動する仕組みを作った。この制度により、サークル間の交流が促進され、新たな協力関係の構築につながった。

さらに、ステージ発表にも工夫を凝らした。従来の一方的なパフォーマンスから参加型の内容に変更し、音楽では手拍子やダンスを加えることで、全員で一つの作品を作り上げ、科学実験では子どもだけでなく大人も興味を持てるユニークな内容を企画した。これらの取り組みにより、来場者数は199名と過去最高を記録し、団体同士のコラボイベントも生まれるという成果を上げることができた。

地域との連携では、程久保ハロウィンイベントやアムールの運営など、多様な活動を通じて地域の方々と直接交流する機会を持っている。

第三の活動軸は、大学内外の団体や社会福祉協議会などの社会人を含めた幅広い交流だ。定期的で開催している「ボランティア交流会」では、大学内 14 サークルに加え、地域団体や社会福祉協議会の方々にも参加していただいている。

この交流会の目的は単なる情報交換にとどまらず、普段の活動内容の共有や困りごとの相談など、ボランティア活動を行う人々が気軽に相談できる環境の提供である。学生と行政を繋ぐ役割は着実に実現できているものの、活動が続ける中で民間企業の協力の必要性も見えてきた。

企業側からも学生との接点を求める声が増えており、今後の重要な課題として「産官学連携」の推進が挙げられる。この課題に対して、まず適切な連携のあり方を議論し、具体的な解決策を考え、実行に移していくことを計画している。

私たちの活動を通じて最も重要な学びの一つは、課題解決への体系的なアプローチ方法である。参加者数が伸び悩んだ際に、感覚的な対応ではなく、根本原因の分析から始めて具体的な解決策を立案し、実行に移すというプロセスの重要性を実感した。「ボランティアはハードルが高い」「情報が掴みにくい」という課題を言語化できたからこそ、対面活動の強化という具体的な解決策に辿り着くことができた。この経験は、社会に出てからも必ず役立つ問題解決能力の基礎となる。

ボランティア活動を通じて、普段学生が接する機会の少ない地域の方々との交流が生まれることも大きな成果だ。世代を超えた交流からは、教科書では学べない実践的な知識や人生経験を学ぶことができる。また、地域社会の一員としての責任感と誇りも育まれる。

夏の工作教室での過去最高来場者数達成や、サークル間交流の促進など、具体的な成果を数字で確認できることは大きな達成感をもたらした。この達成感自信につながり、さらなる挑戦への原動力となった。また、チームワークやリーダーシップ、コミュニケーション能力など、様々なスキルの向上も実感できた。

私たちがボランティア活動を通じて最も強く感じるのは、その「楽しさ」だ。これは単なる学習の楽しさにとどまらず、達成感、感謝の気持ち、人々の温かい感情に包まれる喜びなど、多層的な楽しさである。

従来、ボランティア活動は「奉仕」や「犠牲」といったイメージで語られることが多かったが、実際に活動してみると、与える喜びと受け取る喜びが循環する、非常に豊かな体験であることだと感じる。子どもたちの笑顔、地域の方々からの感謝の言葉、仲間との連帯感など、日常生活では味わえない特別な喜びがある。

ボランティア活動を通じて、自分の行動が確実に誰かの役に立っているという実感を得ることができる。これは単なる自己満足ではなく、社会の一員として貢献しているという実感であり、自己肯定感の向上にもつながる。また、社会課題を身近に感じ、当事者意識を持つことで、より深い社会理解も得られた。

私たちの活動を通じて見えてきた重要な課題の一つが、産官学連携の推進だ。学生と行政の連携は一定程度実現できているが、民間企業との連携はまだ発展途上の段階にある。企業側からも学生との協働への関心が高まっており、三者が連携することで、より大きな社会的インパクトを創出できる可能性がある。

今後は、どのような連携が最も効果的かを議論し、具体的な連携モデルを構築していきたい。企業の専門性と資源、行政の制度とネットワーク、学生の柔軟性と行動力を組み合わせることで、従来にない革新的なボランティア活動が実現できると感じる。

ボランティア活動の真の価値は継続性にもある。一時的な活動では得られない深い学びと成長、そして地域社会との信頼関係の構築は、継続的な取り組みの中でこそ実現できる。私たちは今後も、学生が継続的にボランティア活動に参加できる環境整備と仕組み作りに取り組んでいく。

私たちは産官学連携の推進など新たな課題にも取り組み、ボランティア活動のさらなる発展を目指す。そして、この楽しさと学びに満ちたボランティア活動を、一人でも多くの学生が体験できるよう努める。